Osaka University Knowledge Archive

Title	Call英語授業 : 旧来の枠を越えて
Author(s)	渡部, 眞一郎
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2009, 10, p. 43-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70285
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Call 英語授業　ー　旧来の枠を越えて

渡部 眞一郎（大阪大学 言語文化研究科）

私が Call 教室で英語の授業を始めたのはサイバーメディアセンターの建物ができる以前で、旧ロ号館で Call 教室を使用していた頃です。その当時は Call 教室を使った英語の授業は全体でまだ 3,4 クラスしかなかったと記憶しています。私が Call 教室で授業をしたいと思った動機は、それまでの英語の講読の授業に限界を感じていたからです。学生の英語力をもっと確実にのばす新しい方法を見つけ出したいと考えていました。私は 2009 年夏現在で大学英語教員歴が 32 年と 1 学期になり、阪大では 28 年と 1 学期の間、英語を教えてきて、その間、いろんな英語の授業方法を試みてきました。たとえば、英語講読の授業では訳読形式になることが多く、結局、教員の言うことを学生が一方的に聞くという傾向になりやすい。そこで、クラスを 4 人程度のグループに別けて、グループ学習を導入したこともありました。さらに、日本語に訳すことばかりに囚われることのないように、いっさい日本語を使わず、英語だけを使って授業をしたりもしましたが、これは難しすぎたようで、まず英語を使って、次に同じ事を日本語で説明したりというふうに、変更していきました。また、英語授業には予習が重要なので、次週授業で読む箇所をあらかじめ要約しておく課題を宿題として課し、毎回提出させました。この予習をさせる方式は 7、8 年続けましたが、この宿題を学生は少なからず負担に感じていたようで、結局、予習を一律に強制するこの方式はやめざるをえなくなりました。結果として、1 学期のうちにテキスト 1 冊全体を読み終えるということはできず、読み終えようとすると、学生の予習が足りないために、教師の解説を一方的に聞くだけということになってしまう傾向がありました。無論、そうならないようにいろいろと工夫するわけですが、結局のところ、小テストなどをして、学生の理解度を確かめるにしても、学生の英語力を飛躍的にのばすということになると、旧来の方式だけでは限界があります。つまり、英語学習においては、学習者が英文をしっかり読み、自分でしっかり考え、いろんな疑問を持ち、これに教師が答えるというのが理想的な授業風景だと思うのですが、ただし、そのためにひとつの授業で 1 ページか 2 ページ程度の英文を読むのにあくせくしているのでは話にならないでしょう。精読は英語が読めるようになるためには重要なことですが、精読だけでは学生の英語力はのびません。学生自身のやる気を引き出させる何らかの方法はないか、そう考えて始めたのが Call 教室を利用した授業なのです。

Call 教室における英語授業の可能性はひじょうに大きなものがあります。私にとっては、Call 授業の一番の利点は教師一人に英語の学力の異なる受講生が 50 人いても個別的に対応できるということだと思います。学生の英語の学力は様々です。よくできる学生もいれば、あまりできない学生もいる。いろいろな英語の学力の異なる学生を対象とする授業では、一律の授業をしたのでは、よくできる学生はもの足りなさを感じ、逆に、あまりできない学生は授業についていけなくなる。そこで、一律の授業でなく、学生個々の英語力に応じた授業を行うことが大学での英語教育に必要なことでしょう。一律の授業でなく Call 教室の利点である個別性をいかに生かすことができるでしょうか。

私が Call 教室で用いる教材については、Call 授業用の市販の教材というものがありますが、私はこれを原則として使いません。私の Call 授業では、教材はインターネット上にある授業当日の英文ニュース記事を使うことが多い。それも、受講生個々に関心のある記事を選ばせている。それなりに長い記事を Robo Word という Online 辞書を使いながらしっかり読ませ、その記事の大意を日本語で書かせる。そして、書いた日本語に基づいて英語でも記事の大意を書かせることもある。分からないところがあれば、教師に質問をするが、重要な点は、各受講生がそれぞれに関心のあるニュース記事を選び、関心を

もってこれを読み、内容をしっかりと自分で理解しようと努力することです。この大意を記事とともにプリントアウトさせて提出してもらい、教師はこれを授業外で評価して評点を加え、本人に次週返却する。この方式はここ数年で少しずつ修正改良しながら進めている方法です。もうひとつは、私の元同僚の仙葉豊先生が薦めていたテスティングで、これは現在、補助的に用いている。主に TOEFL の講読テストの練習問題を使って、どれだけ読む力が向上したかを確認するために使っています。

Call 教室においても、上述の個別性を損なうことなく共通のテキストを用いることも可能です。今年の 4 月に、言語文化研究科の他の教員と共同で英語のテキスト *Academic Topics for Listening*（大阪大学出版会、2009）を出版しましたが、このテキストは、大阪大学標準の英語の一端を示すために、言語と文化に関わるアカデミックな 13 のトピックを取り上げて作成したものです。英語リスニングの能力の向上だけでなく、アカデミックなトピックについての知識、理解を深めることができるように編纂しましたので、総合教材としても用いることができます。Call 教室で、さっそく私はこのテキストを使用しています。その使用方法はまだ定まっていませんが、ひとつのトピックについて、各受講生が各自のやり方でインターネットを使って、検索して、調べたり、そのトピック関連の文章を読むことで、知識と理解をさらに深めることが可能です。そのうえでグループごとのディスカッションをしたり、日本語や英語でリポートを書く課題を出すこともできます。学問研究にとって、インターネットが欠かせなくなっているように、英語学習もまたインターネットを正しく利用する方法を学ぶことで、その世界が飛躍的に広がっていきます。BBC のラジオをリアルタイムで聴いたり、アメリカの放送局のニュースその他のビデオを見ることもできます。Call 教室の利点を最大限に生かす授業の形態は決してひとつではなく、数多くあると思います。

最後に、理想の Call 英語授業とはどんなものでしょうか。私が考える理想の Call 英語授業は、到達度、達成度を評価基準とするもので、1 学期で各受講生がどこまで達成できたかということを基準にして成績評価を出せるような授業で、その方式を私は模索しています。無論、その到達度が英語力の向上の度合いと比例することが前提となります。学習到達度と言うと、目標学習内容をどれだけ理解しているかをテスト等によって確かめるというのが従来のやり方ですが、私が言う到達度は、まったく従来の考え方とは異なります。そこで、違いを理解するために、目標まで何段階かクリアしなければならないテレビゲームを考えていただければいいでしょう。目標まで何段階か、たとえば 10 段階あって、ひとつの段階をクリアしてからでしか、次の段階に進むことができないような教材があって、10 段階までクリアできれば、5,4,3,不可の評価成績で最高の 5 で、8 段階までなら 4 で、6 段階までなら 3 で、6 段階に達しないものは不可となる。これが到達度、達成度に基づく評価です。部分的ながら、このような教材はすでに存在していますが、それは主に英語の語彙に関係する教材です。読解のテキストは最初から最後まで同じレベルの英語で、目標設定もしていないのが常です。この旧来の枠を越えて、読解のレベルを段階ごとに上げていったうえで、1 学期の間にどこまで達成できたかによってほぼ自動的に評価を与えることができるような教材を用いて授業を行い、評価をする。結果として、学習者の主体性こそが最重要となりますが、大学での英語教育のひとつの形態として認知されてもいいのではないでしょうか。